医療対談 てんかんを考える

正しい知識広げ偏見なくそう

てんかんは日本人の100人に1人が患っているとされ、小児から高齢者まで誰もが発症する可能性がある脳の疾患です。新型コロナウイルス感染拡大の影響が広がる中、てんかん診療の現状や課題、感染対策の在り方などについて、広島大病院の専門医が話し合いました。（コーディネーターは広島大副理事・山内雅弥さん）

コロナで悪化の例なく 受診体制の連携強化を

広島大病院
てんかんセンター長
飯田 幸治さん

いいだ・こうじ　1990年広島大医学部卒。カナダトロント大小児病院留学。2014年から現職。

広島大病院感染症科教授
大毛 宏喜さん

おおげ・ひろき　1991年広島大医学部卒。米国ミネソタ大大腸外科留学。2010年から現職。

―新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、受診を控える患者さんも出ているようですね。

大毛　新型コロナの発生から約10カ月が経過し、国内の医療機関では、待合室で新型コロナの感染者が出たという報告はありません。流行の初期段階では、医療従事者が感染者の治療中に感染した例はあるものの、現在ほどの医療機関でも、呼吸器症状や発熱などの疑わしい症状のある患者さんには安全に対処できる環境が整っています。PCR検査の態勢も充実してきたため、感染拡大のリスクは減っています。

飯田　てんかん診療では、発作が落ち着いている患者さんや四国、九州など県外からの患者さんの場合、本人や家族の希望で定期検査を延期するケースはありましたが、特に大きな影響はありませんでした。てんかん治療の基本は服薬で、抗てんかん薬は最長で180日分を処方できるので、発作の状態に応じて半年に1度の通院も可能です。手術が必要な場合は、感染対策を徹底した上で対処したため、治療に遅れはありませんでした。

―新型コロナはてんかんの症状に悪影響を与えますか。

飯田　てんかんは脳の慢性疾患であり、新型コロナとの因果関係はありません。症状が落ち着いている患者さんが、新型コロナ感染で悪化した事例もありません。ただし、発熱で発作が誘発されやすい場合などは別です。てんかんよりも、他のリスク因子の方が問題です。

大毛　厚生労働省は新型コロナが重症化するリスク因子として、65歳以上の高齢者、慢性閉塞（へいそく）性肺疾患、糖尿病、高血圧などを挙げていますが、その中にてんかんは入っていません。

―てんかん治療で力を入れていることは。

飯田　てんかんは初期診断が難しいにもかかわらず、日本てんかん学会専門医は広島県内に15人しかいません。てんかんの知識や経験の豊富な医師が少ない地域もあります。患者さんを診療する医療機関は最初に診る1次診療（開業医）、2次診療（県内の中核病院）、外科治療のできる3次診療（てんかんセンター）があり、3者のネットワーク強化に取り組んでいます。

大毛　かかりつけ医（開業医）との連携が大切ですね。新型コロナに関しても感染が疑われる場合の相談先は、保健所の相談センターから、地域の身近な医療機関が中心になりました。てんかんも新型コロナも、適切に受診できるネットワークづくりが求められます。

飯田　当センターは、てんかんの診断に悩む全ての患者さんに適切な医療を提供しようと、6月からオンライン診療を始めました。かかりつけ医を通じて予約を受け付け、画像データや診療記録を事前に提出してもらいます。診療当日はパソコン画面を通じて患者さんとかかりつけ医から症状を聞き取ります。このほか、セカンドオピニオンを求める患者さんにもオンラインで対応します。

―患者への差別や偏見も、共通する問題です。

飯田　偏見の背景には疾患への無理解があります。てんかんは脳の慢性疾患で、原因は交通事故による後遺症や脳梗塞、脳卒中、認知症の場合もあります。それなのに、てんかんは生まれつきの特殊な病気だと思い込んでいる人が非常に多いのが現状です。

大毛　新型コロナの場合は感染者や医療者へのバッシングが問題になりました。やはり知識の不十分さから、他人に対して不寛容になるものと思われます。「自分だけは感染しない」という間違った認識もあるのかもしれません。

飯田　就労の現場で、てんかんの発作で倒れると、「2度と発作を起こさない」という医師の診断書の提出を求められたり、解雇されたりしたという話を聞きます。しかし、脳卒中や低血糖発作で倒れた人にそんな対応をするでしょうか。けいれんだけでなく、ぼうっと一点を見つめたり、周囲をうろうろしたりするといった多様な発作があるため、周囲から誤解を受けやすい点も問題です。

大毛　偏見や誤解を解消するためには、正しい情報の発信が欠かせません。

飯田　広島ではてんかんへの理解を深める活動に力を入れており、最新治療法などを知ってもらうための「市民フォーラム」を毎年開き、今年で11回目になります。

大毛　新型コロナの主な感染経路は、二つしかありません。せきやくしゃみ、会話時などに唾液と共に飛び散るウイルスを吸い込む「飛沫（ひまつ）感染」と、ウイルスが付着した物に触れた手や指で口や鼻を触ることで起こる「接触感染」です。感染を防ぐにはマスクを装着し、鼻と口を覆うのが基本です。その上で「3密」の回避と手指消毒を徹底することが大切です。こうしたエビデンス（根拠）に基づいた情報を、分かりやすい形で発信する必要性を感じています。感染予防の基本を徹底しておけば、屋外なら密をそれほど気にしなくても大丈夫です。楽観視は禁物ですが、過剰反応も慎むべきです。

―ありがとうございました。

〉〉〉てんかん

大脳の神経細胞が異常に興奮し、突発的な発作を繰り返し起こす慢性疾患。全国に約100万人の患者がいるとされる。3歳未満の幼児と70歳以上の高齢者に発症者が多い。発作の症状も多様で、小児にはひきつけやけいれんが多く、高齢者には意識消失がよく見られる。治療は薬物療法が中心。てんかん薬は現在、20種以上ある。難治性のてんかんと診断された場合は手術を行う。

11/1（日）に市民フォーラム2020「てんかんを考える」

広島大病院てんかんセンター長の飯田幸治さんらを講師に迎えた市民フォーラム2020「てんかんを考える～コロナ禍に向き合うために～」（中国新聞社主催）が11日1日13時30分から、広島市東区の広島県医師会館医師会ホールで開かれます。聴講を希望される方は、はがき、ファクス、電子メールのいずれかで26日（月）までにご応募ください（必着）。入場無料。定員150人。オンライン視聴もあります。応募多数の場合は抽選になります。

はがき　〒730-0854 広島市中区土橋町7-1　中国新聞ビル3階 メディア中国 医療セミナーチーム「てんかんを考える」係
FAX　082-232-7977
eメール　event-2@media-chugoku.jp
問い合わせ　☎082-236-2860（土日祝を除く9:30～17:30）
広島大病院てんかんセンターへの問い合わせ　☎082-257-1719

郵便番号、住所、名前、年齢、電話番号、メールアドレス、てんかんに関する質問（あれば）、参加方法（来場かオンライン視聴か）を明記してください。
※質問は講演や質疑応答の参考にさせていただきます。
※個人情報は、聴講券の発送と抽選に漏れた方への通知（応募多数の場合）のために利用し、メディア中国が責任を持って管理します。

専用サイトからも申し込みできます。
右記の2次元コードを読み取ってください。

企画・制作　中国新聞社地域ビジネス局